

なのはな通信

No.29 2019.2



研修旅行 原爆ドーム前

「漠然としていたものがはっきりしたような気がした。諦めないで患者さんの生命活動を発揮させることができるよう患者さんと共に回復の可能性を追求し続けたいと心に決めた。」卒論発表で述べられた3年生のレポートの一部です。

学生は、学校での学びと臨地実習で、必死に生き抜こうとする人間の力強さ、人間の回復力のすばらしさを実感し、社会や平和と人権そして医療者の役割にもしっかり目を向け、人としての成長も遂げています。三年間の学びの集大成であるこの機会は学生の大きな成長を実感する時でもあります。こういった学生の学びを支えているのは、民主的で経験豊かな多くの教育実践者の方々の惜しみない応援や民医連の事業所が地域住民の皆さ

んと共に歩んだ医療活動の歴史と実践が学生たちに豊かなフィールドとして提供され、教育力として学生の成長に大きな役割を果たし

ているからであることを改めて痛感します。まさに本校の財産です。心から感謝申し上げます。

「頑張っている学生を応援したい」と2017年10月から始まった東葛食堂はボランティアの皆さんの暖かさが伝わる美味しくてバランスのよいメニューが学生に大好評です。地域のボランティアの皆さんと学生が交わすたくさんの笑顔にこの学校の明るい未来も見えてくるような気がします。



校長 窪倉 みさ江

学生と 共に歩んだ一年

1年生

24期生

担任

生田知歩

高田澄子

富田智恵



ナーシングセレモニー

私たちは2018年4月に東葛看護専門学校に入学しました。入学してすぐに行われた交流研修では初めてのグループワークに臨みました。

80歳代女性A氏は、戦前、戦中、戦後を体験された方で「戦争を二度としないでほしい」と話をしてくれました。小学校4年生で大東亜戦争(太平洋戦争)を体験し、昭和19年頃、空襲がひどくなり、空襲警報が鳴るたびに畳の下に掘られていた防空壕に逃げ込みました。戦時中、道端

は死体だらけで、特に防空壕の中は蒸し焼きの死体が多く、怖かったことを鮮明に覚えていると話され、また、戦後憲法が変わり“お国のために”という概念が覆されたが憲法が変わったことを気にする余裕がないほど、生きていくのに精一杯だったと話していました。A氏が当時よく作っていた「ふすま粉」を使った料理である、すいとんと油焼きを作って、食べることにしました。できたものを食べると口の中の水分を全てとられるようで、

とても美味しいとは言えませんでした。当時のすいとんを食べることで、戦争の悲惨さ、苦しさを想像することができました。

A氏の話してくれた内容を振り返り、戦争は人々の命を奪う行為であり、“二度と戦争をしてはいけない”と強く思いました。

交流研修を通して、1人の方から話を聞いた私たちが7人いたら7通りの訪問記があり、一人一人の感じ方、捉え方が違い、また、その違いを意見交換する



交流研修



ナーシングセレモニー

ことで、考え方が発展することを実感しました。“ありのまま”とは、聞いたその言葉から思いを想像することが看護をするにあたって大切だと考えました。

そして7月には初めての基礎看護1－1実習を行いました。

Bさんは腰椎圧迫骨折で入院をしている方で、患者さんや学生にも冗談を言って笑顔にさせてくれました。入院前は自宅の庭の蘭の花を大切に育て、その花が心配で早く帰りたいと毎日リハビリに取り組んでいました。早く歩けるようになりたいという希望を強く感じました。骨折のため安静にしなければならず、「ずっとここに居なきゃいけないのが辛い」と話していました。

病室で環境整備を行なった際に、内服薬が置いてあるのを見つけ、学生はBさんの飲み忘れだろうと判断し、指導者に渡しました。しかしそれは飲み忘れがないように、次に服用する分を見やすいところに置いたBさんの工夫だと分かりました。1人で動ける範囲が限られているBさんの身の回りは物が多くあり、内服BOXに薬が入っていたら、見やすく忘れにくくなると考え、作ることにしました。一包化された内服薬を出し入れしやすいよう箱の大きさを調節し、朝・昼・夕・寝前と分けてみやすい工夫をしました。Bさんに喜んでもらえるようにと好きな紫色の折り紙で作成し、仕上げにBさんに折り紙の花を貼ってもらうようお願いをしました。

「指先が言うことを聞かない」と話しながら最後まで貼ってくれました。完成した時の嬉しそうな表情を見て学生も自然と嬉しくなりました。

基礎看護1－1実習を通して、患者さんが自分たちの実践を通して喜んでくれた時、それが自分たちの喜びに繋がり、「患者さんをもっと知りたい」「患者さんにもっと喜んでほしい」という思いが生まれた実習でした。

10月に基礎看護学1-2実習で5日間の実習に臨みました。

Cさんは80代女性で大腸炎により入院していました。話すことが好きで学生が病室へ行くと、ベッドに横になっていても起き上がって話をしてくれました。入院前、自宅で娘さんが1人で介護をしているため「トイレまでは1人で行けるようにしたい」という願いがあり、リハビリを一生懸命行なっています。その姿を見て歩きたいという思いが伝わり、学生にも勇気をくれました。

眼底出血でボンヤリしか見えないCさんの“手のリハビリになれば”と思い、好きな美空ひばりの「川の流れのように」を流し、塗り絵をしました。歌を聴いている時のCさんは、何かを思い浮かべるような穏やかな表情をしていました。音楽はその時代を表すもので、津波で流されもう帰れない福島で、好きな植木を楽しんでいた頃を思い出しているようでした。Cさんの幸せな頃を思い返し、穏やか

な表情になったのではないかと考えました。入院して懐かしい曲を聞くことで、こんなに表情が変わることに驚きました。私たちが実践した内容が患者さんの喜びにつながっている実習だと思いました。

看護師とは患者さんにとって一番近い存在で、患者さんの発言や、行動、表情から何を考え、何を願っているかを捉えることが大切だと思います。そして、患者さんのありのままを捉えることによって、患者さんの思いを第一に考えた行動ができ、一人一人に合った応援を目的を持って実践することに繋がると思います。そのために私達は患者さんから学ぶことを忘れずに、日々の学習に取り組んでいきます。



ナーシングセレモニー

学生と2年生 共に歩んだ一年

23期生

担任

戸澤亜矢

大井 涼

江島典子



体育祭

2年生の学びは生命活動から始まりました。宇宙の誕生から地球の変化に伴い150億年かけて生物たちが身体の機能や器官の進化をくり返し、私たちの身体を獲得してきたことを知りました。生命が長く壮大な歴史の中で成し遂げてきた進化を、ヒトは母親の胎内にいる間で行うと知り、たった40週で一つの細胞から人間の姿になっていく生命の凄さを感じ、個体発生は系統発生をくり返すという言葉の意味を実感しました。身体を構成する60兆個の細胞がどのよ

うに働き生命活動を行っているのか細胞レベルで学びを深めることの大切さを学びました。私たちの身体はホヤやナメコジから進化を遂げ、神経系や内分泌系を駆使し、複雑な物質を使い分けて恒常性を維持していることを知りました。バラバラだと思っていた8つの系は、全てが連携しあい生命活動を行っているということを学びました。

成人Ⅰ実習では左基底核梗塞の80歳代前半の男性A氏を受け持ちました。声かけに反応がないA氏を前に、何ができる

のか戸惑いました。A氏はEDチューブ自己抜去の危険性があり、ミトンと抑制帯をつけていたため、関節拘縮・筋力低下しないようにミトンと抑制帯をつけている時間を必要最低限にしました。また、根気強く話しかけること、手足を動かしてもらうことによって脳へ働きかけていくことを計画しました。覚醒状態は日によって違いましたが、自身で歯を磨いたり、温タオルでEDチューブを避けて顔を拭く姿がみられることもありました。A氏の頑張りで実習9日目

にはリハビリで平行棒介助歩行が可能となり、回復していく姿をみることができました。脳には可塑性があります。この仕組みが、リハビリと抗凝固薬による治療、経管栄養、そして約3週間A氏に働き続けたことの根拠であり、回復した理由の1つだと学びました。A氏に毎日働きかけていったことは生命活動への働きかけそのものであったと学ぶことができました。

夏休み後は外科・精神・小児・母性の各論実習に臨みました。外科実習で受け持った胃全摘出術を受けた患者さんは、術後早期離床に「痛くて動けない」と離床がなかなか進みませんでした。痛みを耐えながら離床する患者さんを見て、なぜ痛みがあるのに早期離床を行うのか疑問でした。その疑問を健康学習会で患者さんと一緒に学びました。身体を動かすことは、酸素が多く取り込まれ、麻酔や手術で障害を受けた全身の回復に繋がると知り、改めて人間の生命活動における酸素の重要性を学ぶことができました。

精神実習では、統合失調症の40代後半男性、A氏を4クール通して受け持たせて頂きました。A氏は働きたい思いがありましたが、病状悪化をくり返し就労できずにいました。1クール目ではB型就労事業所の体験、3クール目では5回の就労評価を終え就労できました。他職種がA氏を応援していることからチーム医療の大切さを実感しま

した。20代後半の発症から経過を辿ることで、薬物・精神療法を受けながら統合失調症と向き合い頑張ってきたことが就労にまで至ったことを学びました。精神実習に行く前は、精神疾患に怖いといった偏見をもていましたが、私たちと同じ「働きたい」という思いを持ち頑張っていることを知りました。また、精神疾患があるということで就労が困難になる社会問題について学びました。

小児実習で受け持たせていただいたⅠ型糖尿病の3歳4ヶ月のEちゃんは血糖値が72～550mg/dlであり、血糖測定やインスリン注射で1日に計13回も針を指していました。Eちゃんにとって血糖コントロールは大切な治療であり、頑張っているEちゃんと手作りの万華鏡と一緒に作りぬり絵など成長発達に合った遊びを行い治療が行えるように応援しました。次第に血糖測定やインスリン注射に慣れアルコール綿を自ら開封し、指を拭くなど注射に取り組むようになりました。血糖コントロールが合併症予防に繋がるため、退院後や将来のことを考

え応援していくことの重要性を学びました。

母性実習の分娩見学では頑張っている産婦さんに何と声をかけたらいいのか分からず、マッサージをしながら見守りました。また、グループ内で学びを共有し、同じ経腔分娩でも分娩の進行状況や胎児の状態に違いがあると学びました。生命活動で、人間は他の哺乳類と違い、直立二足歩行と脳の巨大化という進化が原因で難産になったと学びました。人和其他の動物では産道の形態学的構造に大きな違いがあり、人間以外の動物の産道は、一直線のトンネルのようになっています。しかし、人間は四足歩行から二足歩行への形態変化に伴い背骨だけでなく産道にも歪みを与えたため、S字状で急カーブのようになっていると学びました。出産は大変だと理解していましたが、実際に見学させて頂くことで母子共に命がけなのだと感じ、感動しました。



生命活動 田植え



学童での健康学習会

学生と 共に歩んだ一年

3年生

22期生

担任

高橋里美

菊池静華

福井慶子



体育祭

《研修旅行》

私たちは、研修旅行で山口県の岩国と、広島に行きました。1日目に岩国基地に行き、米軍の戦闘機が飛行している場面に遭遇しました。その騒音に、基地が私たちの日常に存在していたらとても生活が出来ないと感じました。岩国だけでなく、その基地が存在することの負担を基地周辺の人々に押し付けている現状があることを知り、軽視できない問題であると思いました。また、8000億円もの莫大な費用が岩国基地に費やされており、これらは全て、私たちの税金から「思いやり予算」として賄われていると知りました。私たちの税金を軍事費に使うのではなく、国民を守る医療・福祉に使ってほしいと強く願いました。

2日目は平和記念資料館の見学と広島県被団協の方の案内で碑めぐりをし、戦争の悲惨さを目の当たりにしました。また、被爆体験をした小方さんから話を聞き、その中で「当時の記憶が深く残っていて、57年間被爆体験を話すことが出来なかった」という言葉が印象に残りました。憲法改定や核兵器禁止条約不参加という国の動きに対して、事実を知り、自分の意思で平和を守ろうとしなければ守ることができないと学びました。

4日目は、戦時中に毒ガス製造の為の工場が作られた大久野島に行きました。私たちは日本軍が戦争で毒ガスを開発・使用していたことを知りませんでし

た。毒ガス製造をしていることを知らされずに、製造に関わった工員は健康被害に苦しみ、またその毒ガスでたくさんの中国の人達が戦争で殺傷されました。現在も日本軍が遺棄した毒ガスの残骸が発見されており、今なお苦しんでいる人々がいることも知りました。私たちが事前学習で調べて初めて知ったように、加害の歴史を知らない日本人は多いと思います。被害と加害の両方を学ぶことで、改めて戦争



研修旅行 大久野島



研修旅行 講師 藤原先生と

初めに認知症の歴史について調べ、以前は「精神病」として偏見・差別があり、現在の偏見にも繋がっていると学びました。介護保険制度について調べると、認知症は初対面の人

には症状が判断しにくく、要介護度が低いと判定されてしまい施設やサービスを受けられないことがあると知りました。認知症の方への取り組みとしては、住み慣れた地域で暮らしていけるよう新オレンジプランなどの施策があると知り、地域では新オレンジプランをもとに認知症サポーターの養成や、医療と地域の連携を図るなど取り組みをしていました。しかし、地域によって差があり、認知症高齢者が増加している現状と施策が追いついていない実態がありました。そして、介護者や認知症の方のそれぞれの立場から、どのようにサポートするべきか考えました。認知症について学び、認識は大きく変わりました。A氏と妹の認知症は、生活や健康にも影響を及ぼすため、学生は「日常生活の中で困っているのでは

ないか」と考えていましたが、本人たちは困っていませんでした。「認知症＝困っている人」という認識ではなく、困っているのは本人より、周りの人だということに気付くことができました。医療者からみた「A氏にとって安全な生活」ではなく、A氏の願いに沿って自宅で安心して暮らすことができるよう支援するのが本来の医療者の役割であり、実習中本当に患者さんの立場に立っていたのかと考えさせられました。そもそも、認知症は治らない病気であり、誰もがなりうる疾患です。何よりも大事なことは、「矯正すべき障害」ではなく、本人が生きがいをもって人生を送れることではないかと感じました。「認知症の〇〇さん」ではなく、「認知症とともに生きている人」であり、自分らしく生きることには制限があってはならないと思います。「病気や障害の有無にかかわらず、誰もが平等に自分らしく生きることができる社会」を目指していくために、「患者さんの立場に立ち、患者とともに闘う看護」を今後も追求していきたいです。

の愚かさを知ることが出来ました。

研修旅行を通して私たちは改めて憲法や平和の意味を考えることができました。憲法9条を守り、平和な日本であり続けるために、自分たちになにが出来るのかを考え続けていきたいと思いました。

《卒業研究ゼミナール》

総合実習で受け持たせて頂いたA氏は認知症を患い、妹と同居生活を送っていましたが、妹の認知症もあり、今後内服・食事・酸素機器の管理が難しいと予想され、施設方針となっていました。A氏の「家に帰りたい」という願いを実現するために、どのような制度や地域での取り組みがあればA氏と妹が安心して生活していけるのかと考え、卒業研究を進めました。



研修旅行フリータイム 宮島



総合実習 健康学習会



東葛祭

学校行事

第24回 東葛祭

2018年9月28日・30日に東葛祭を行いました。今回は『結〜みんなでつくろう平和の輪〜』を東葛祭のテーマに行いました。「学生間で交流を深めたい」「地域の方との交流を大事にしていきたい」などの意見が学生から上がり今年のテーマに決まりました。

東葛祭1日目は学びの発表を行いました。各学年が学んだことを発表し、学びの共有を行いました。1年生は車イスウォッチングについて発表を行いました。2年生は生命活動の内分沁について発表しました。3年生は老年実習で学んだことを発表しました。午後は、有馬理恵さんを講師に迎え「差別

と戦争をなくすために〜おしばいとおはなし」というテーマでお芝居とお話を交えて講演して頂きました。

2日目は食事処、フリーマーケット、子ども縁日、お化け屋敷などを学生が中心となり夏休み前から準備・企画してきたものをお越しいただいた皆さんに楽しんでいただけたと思います。

当日はあいにくの雨でしたが、130名以上もの地域の方々にお越しいただき、学生たち自身も楽しむことができました。後夜祭ではグループに分かれ、レクリエーションを行い、大盛り上がりとなり、今年の東葛祭も大成功をおさ

めることが出来ました。

東葛祭実行委員長
廣内真菜美



公開講座 有馬理恵さん



リラクゼーション

第24回 体育祭

「動かせカラダ!! 流そう汗を!! ストレスも一緒に!!」
～感じよう我らのホメオスタシス～

6月29日に流山キッコーマンアリーナにて、体育祭が行われました。

今年は種目を増やし、最初に学年全員で交流することを目的としたじゃんけん列車、前年度に引き続き高評価であった玉入れ、借り物競争、怪我をしないように柔らかいボールを使用した男女混合ドッジボール、男女混合バレーを行いました。

去年時間が多く余ったため、今年は種目を増やし、1つの競技の時間を短めに行いました。どの学年も力を入れていて、競技に出る

生徒同士で円陣を組んだりと活気で溢かえていました。学生同士で写真を撮ったり、ギャルのコスプレやお揃いの服で参加するなど体育祭がより一層賑やかになりました。

1年生は初めての体育祭だったのに応援も団結力も学年1番の力強さを見せつけ、3年生は圧倒的な強さで優勝を果たしました。

今年は、異例の熱さで熱中症対策として体育祭本部にスポーツドリンクを置き、ルールも安全面を考えて行ったことで、怪我人や熱中症者を出すことなく、楽しく体

育祭を終えることが出来ました。

体育祭実行委員長 山崎健大朗



じゃんけん列車



玉入れ カウント中

平和ゼミナール

原水爆禁止2018世界大会長崎



今回 2018 年原水爆禁止世界大会に学生5人で参加してきました。

1日目、開会式では、日本全国、世界中からも多くの方たちも参加していて、核兵器禁止の願いが世界的な活動であるとなりました。Ring！link！zero！では米国・英国・韓国などの学生と交流し、日本が核兵器禁止条約に参加しなかった事をどのように考えているのかを質問しました。すると「被爆国であるのに政府が賛成しないのが理解できない。なぜ日本は参加しないのか？」と質問が返ってきました。このことについて明確に答えることが出来ませんでしたでしたが、海外からみても

日本政府の対応に不信感がある事が分かりました。海外でも非核化に向け大きく動いている今なぜ日本は核の傘にすがらねばならないのか？唯一の戦争被爆国である日本が禁止に向けもっと発信していくべきであると思いました。

2日目、動く分科会、被爆者訪問企画・似島に参加。

被爆者訪問では二人の被爆者の方からお話を聞きました。被爆時の話は想像していたよりも遥かに悲惨で聞いているだけで怖くなりました。だからこそこの先も語りついでいかなければならないと思いました。

似島は戦争の加害と被害が学べる場所で、日露戦争では捕虜

収容所があったり、第二次世界大戦などで弾薬庫や薬品庫として使用されていた所で、原爆投下後多くの被爆者が水や薬品を求め運ばれてきた島。当時の建物は殆ど残っていなかったが、その跡地や慰霊碑などを巡り、静かで穏やかな海に浮かぶ緑豊かで美しいこの島で本当に“戦争”があったのだという恐ろしさを感じました。

3日目の閉会式も通し被爆者の核反対への想いや投下当時の悲惨さをよく知ることが出来ました。

今後も社会に目を向け学んでいきたいです。

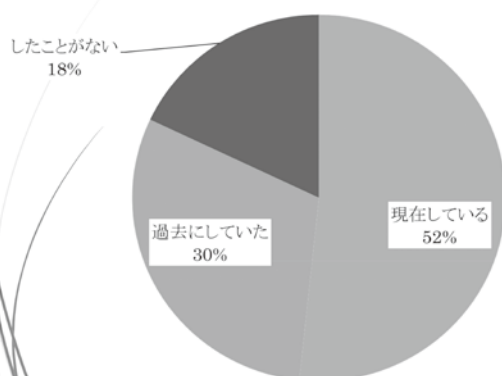
アルバイト実態調査から給付型奨学金運動へ

【アルバイト実態調査の経緯】

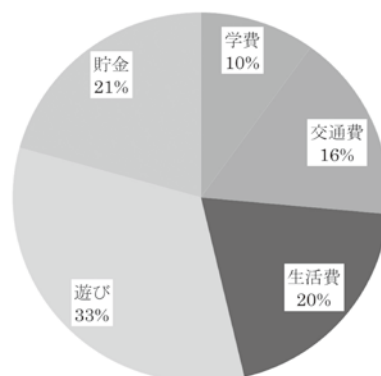
このアンケート調査は、学生が学びに専念できない理由として、経済的事情によりアルバイトをせざるを得ない状況にあるのかどうかを明らかにするために行いました。自分たちの周りには、アルバイトが原因で遅刻や欠席をしてしまう学生がいること、放課後はグループワークに時間を割くことができないほど多忙で大変だという仲間もいます。調査にあたって学習したVTR「“見えない貧困” ～未来を奪われる子どもたち～」では日本の6人に1人の子どもが貧困世帯であること、「家族旅行に行けない」「部活ができない」「進学ができない」等の剥奪指標が保障されず生活水準に格差が生じてしまう実態を知りました。さらに、貧困が普段の生活からは見えないものであるということを学びました。学ぶ権利が保障されない実態を明らかにする必要があると考え、学生のアルバイト実態を把握するための調査を行いました。

【アルバイト実態調査結果】

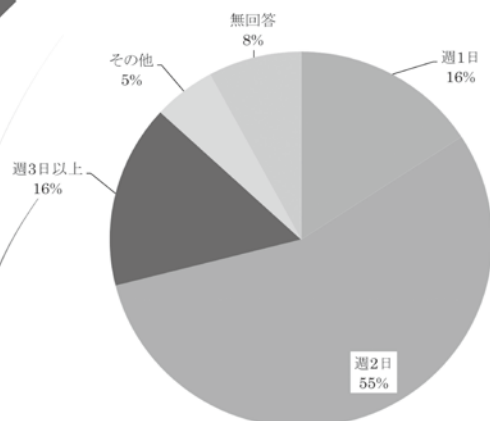
アルバイト経験について



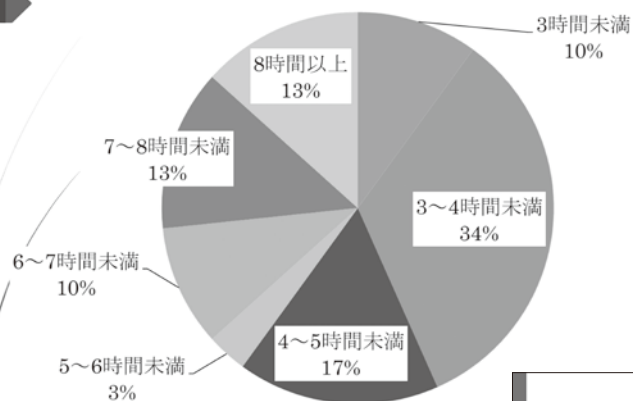
アルバイトでの収入の使い道



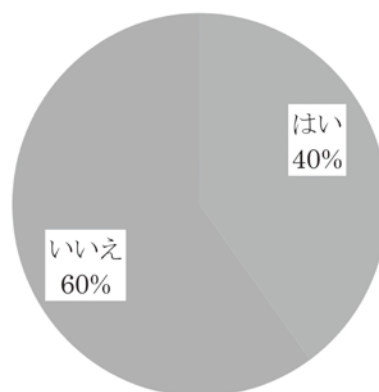
週に何回働いているか



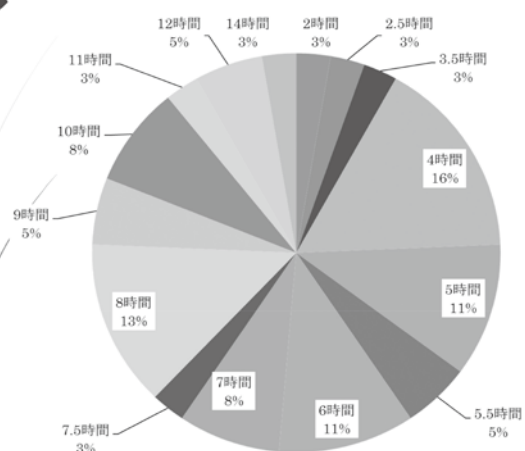
平日（1回）の労働時間について



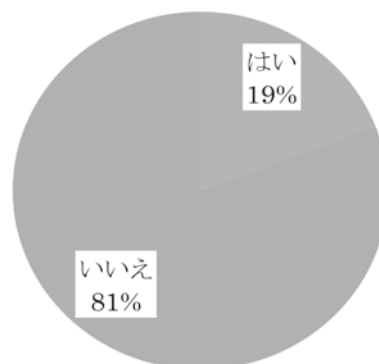
アルバイトによって学校生活に影響があるか



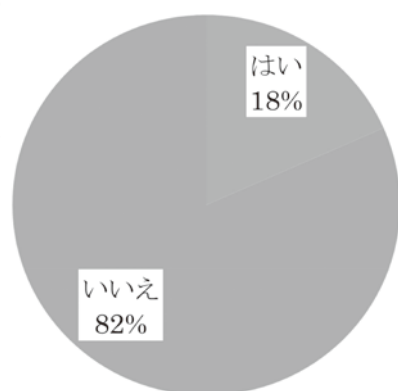
平日最長何時間働いたか



アルバイトによって学校に行きたくないと思ったことがあるか



実習時にバイトをしているか



その他、アルバイトで困ったこと

- 忙しくないから早上がりさせられる
- 希望通りにシフトが入っていない時があったり、有給を使いづらい
- 人手が常に少ないから、残業や早入りが当たり前
- やめたくてもやめられない
- シフト交換のとき代わりの人を見つけなきゃいけないくて、何があっても代わりがいないと休めない

【調査結果を社会の問題として受け止める】

学生の中にはアルバイトばかりしている人は居たが、それぞれの家庭の問題であり、深く聞いて欲しくないだろうと思い、触れることはできませんでした。しかし、2年次の地域フィールドで現在の社会状況を目の当たりにして、認識は大きく変化しました。大田区の町工場では粉塵や油が飛び散る作業場の中で、マスクをせず作業を行っていました。ステンレス、ニッケルアレルギーになってしまう劣悪な労働環境の実態を知りました。町工場の職人達は優れた技術を身につけながらも低賃金であり、劣悪な職場環境の中で生活をなりたさせるために過酷な長時間労働を強いられている実態を知りました。

診療所で、アスベスト健康被害を受けた方のお話を聞きました。高度経済成長を支えてきた建設労働者は、国や企業からアスベストの使用を義務付けられ、大量に曝露したことで肺がんや悪性中皮腫などの健康被害を受けたという実態を知りました。そのうえ重層下請け構造によって労働者は利益を搾取されている実態を知りました。地域フィールドを通し、日本の格差社会の実態、ワーキングプアの多さ、厳しい経済環境で生活を送っている人たちは身近にも沢山いる事を知りました。それは決して自己責任ではなく社会によるもので、貧困は各家庭の問題ではなく、社会問題なのだと気づきました。

【給付型奨学金制度を目指して流山市へ陳情に】

もっと学ぶ時間や経済的な心配をせずに、安心して学ぶことができるような社会になってほしいと思い、2018年7月に流山市役所に給付型奨学金制度の制定のための陳情を行いました。初めての経験だったためとても緊張していたが、一人一人自分の思いを伝えることができました。私たちはこの学校に入学する前は、正直社会の問題について興味や関心はありませんでした。3年生と一緒に東京民医連の集会や東葛教職員の研究交流集会で調査報告をして、多くの方に理解していただきました。そして流山市役所に、給付型奨学金制度制定を求める陳情書を提出しました。社会に関心のなかった私たちが実態を訴えるなかで「自分達にもできることがある」と感じるようになり自信にも繋がりました。これまで初めての連続で戸惑いながらも活動をすることで、入学前の自分が大きく変わったと感じます。

看護学生への奨学金支給に関する陳情書

流山市長 井崎 義治 様

2018 年 7 月 27 日

東葛看護専門学校第 20 期自治会

自治会長 印

連絡先 東葛看護専門学校

電話 04—7158—9955

【陳情の要旨】

- 1、本校の所在する流山市に看護学生の為の給付型奨学金制度の制定を希望します。
- 2、政府や千葉県に対し、給付型奨学金や修学資金制度の拡大を図るよう求めて下さい。

【陳情の理由】

私たち東葛看護専門学校第 20 期自治会では、楽しい学生生活を目指し、学生全員の積極的な活動、学年を超えての自主性、民主的な交流の原動力になる活動をしています。

2015 年に講師、父母代表、学生、教員からなる学校評価懇話会（学校関係者評価）で学生の居眠り・欠席等の授業参加について指摘されました。なぜ居眠り・欠席をしてしまうのかという面に視点を置き、昨年度には学生の経済状況について調査するため東葛看護専門学校の学生にアルバイト実態調査を実施しました。アルバイト実態調査を行った結果、学びに専念できない理由として経済的事情からアルバイトをせざるを得ない状況にある学生が多数いることが明らかとなりました。

アンケート回答者のうち 84%もの学生が奨学金を利用し、その使い道は 1 位学費、2 位交通費、3 位生活費となり、1～3 位までで 76%を占めています。そして不足分を埋めるため、アルバイトをしている学生が 82%いました。臨地実習期間中でも約 5 人に 1 人はアルバイトをしています。そのアルバイト収入の使い道については、46%が学費・交通費・生活費と、生活をする上で必要なお金になっています。学費を払うためにアルバイトを優先し、十分に学習時間が取れない学生も多くいます。中には「代わりがないとなにがあっても休めない」などの理由で、学校を休むことを考えた学生も 19%います。そのため、アルバイトの収入がなくては学業を継続することが困難で、精神的に余裕の持てない学生もいる状況です。看護学校や看護大学の進学を考えても、高額な入学費や授業料を支払うことができず、看護師の道を諦めた友人もいます。もし途中で両親が居なくなったら、自分が体調を崩し学校を辞めざるおえない状況になったら、と考えると今の奨学金制度は私たちが安心して学ぶには不十分であると感じました。なぜ学ぶ権利のある私達が心と時間に余裕を持って学ぶことができないのか、貧困により学ぶ時間、将来に対する希望が奪われてしまっているのか、私たちはもっと平等に学べるような社会になって欲しいと思いました。この問題は個人の問題ではなく、社会全体の問題であるということを知りました。私達が平等に、安心して学ぶことが出来るように、給付型の奨学金制度が必要であると感じました。

【わたしたちは安心して学びたい 陳情から署名活動へ】

陳情書だけでは給付型奨学金制度の制定は難しいかもしれないとアドバイスを頂き、自治会役員で話し合い署名活動をしていくことを決めました。署名用紙の作成は初めてで臨地実習期間で思うように進みませんでした。市議会議員さんや先生に協力して頂きながら、約3か月間かけて署名用紙を完成させることができました。多くの署名を集めるためには、全校で拡散方法を話し合っています。直接訴え、ポスター作製やSNSなどに私たちの活動を載せることで、署名活動をひろげていこうと思います。また、高等教育無償化プロジェクトFreeの東京大学の学生たちとも活動交流をしたので、Freeとも共同して活動を広げていきたいと思っています。

千葉県知事 鈴木 栄治 様
流山市長 井崎 義治 様

勤医会東葛看護専門学校
第21期 学生自治会

看護学生への給付型奨学金制度制定の請願

【請願趣旨】

本校では、全学生の8割が奨学金を利用し、さらに8割を超える学生がアルバイトをして学業を成り立たせています。周囲には、高額な入学費や授業料を支払うことができず、看護師の道を諦めた友人もいます。私たちは、患者さんの健康回復を応援できる看護師になりたいと日々学んでいます。しかし、アルバイトに時間を割かざるを得ない状態で、心も時間も余裕がない日々です。もっと、学ぶ時間や経済的な心配をせずに学べる社会になって欲しいと思っています。これは個人の問題だけではなく、社会全体の問題であると思います。看護師をめざす学生が、安心して学ぶことが出来るように、給付型の奨学金制度の制定を請願します。

【請願事項】

1. 本校の所在する流山市に看護学生の為の給付型奨学金制度の制定を希望します。
2. 国や千葉県に対し、給付型奨学金や修学資金制度の拡大を図るよう求めて下さい。

氏名	住所

【取り扱い団体】

勤医会東葛看護専門学校、東京勤労者医療会、東葛健康友の会
千葉県民主医療機関連合会、東京民主医療機関連合会

東葛看護専門学校 〒270-0174 千葉県流山市下花輪 409 番 tel 04-7158-9953

自治会役員



ようこそ先輩

私は、豊四季訪問看護ステーションサテライト我孫子わかくさで訪問看護師として働いています。以前は病棟勤務でしたが、私には家に訪問して患者さんと



1科13期生 富岡佐千枝

じっくり接することができる今のほうが自分に合っていると思っています。環境やまわりの仲間にも恵まれ頑張っています。大変な時も多々ありますが、何よりも患者さんやそのご家族の方たちに日々癒されています。そしてその中で考えさせられ学んでいます。訪問看護は魅力あるやりがいのある仕事です。

糖尿病で血糖測定とインスリン注射で訪問させていただいている90歳の女性の患者さん。この写真はご自分のチェキカメラで撮影してくれたものです。訪問するスタッフに「あなたはまだだったわね」と一巡するまで撮影してくれました。暗くてよくわからないかもしれませんが、‘私ってこんな顔で患者さんと接しているんだ、楽しそうに笑っている！やっぱりこの仕事が好きなんだな’と再確認させてもらった大切な一枚です。

看護師を目指そうと入学したのが38歳の時。ママ学生さん含め、みなさんいろいろ大変なことも多いと思いますが頑張ってください。実習に来る学生さんにもいつもパワーをもらい初心を思い出させてもらっています。私も看護師としてはまだまだ勉強の日々です。共に頑張りましょう。

学生時代、田植えや地域フィールドの授業は“看護師になるのに、どうしてこの授業が必要なんだろう”と疑問に感じながら受けていました。でも、実習になり患者さんとの関わりが増えるたび、それまでの学びはすべて看護に繋がり、自分の財産となって残っていくのだと実感していきました。



2科13期生 栗原早苗

“野に咲くカタバミは、どんなに踏まれても負けずに復活してきれいな花を咲かせる。強くて逞しい花。そんなカタバミが一番大好き。あなたもこれから色々大変なこともあるだろうけど、何があっても強くくじけず、カタバミのようにきれいに咲いてほしい。そしていつも笑顔を保ち続けてね”

老年実習で受け持った患者さんから実習最終日にいただいた言葉です。この言葉が、自分にとって看護師としての原点であり、大切な宝物です。

私は現在、野田市にある訪問看護ステーションで勤務しています。日々、利用者さんとの関わりでは楽しいことばかりではなく、悩み苦しみがくじけそうになることもあります。“もう、この利用者さんの訪問はできない”と悩み、一度訪問をやめさせていただいた利用者さんがいました。でも、総合実習でいただいたこの言葉が自分を後押しし、訪問を再開させていただき、今では利用者さんとも笑顔で過ごすことができています。もう10年近くたちますが、患者さんの言葉に助けられています。

みなさんも、3年間という学生生活の中では、それぞれいろいろな壁に当たり辛い時もあると思います。しかし、困難に打ち勝って得たものは自分の力になり将来必ず役立ち、宝となって残っていきます。一人では乗り越えられなくても、仲間や先生たちとともに頑張ってください。

私もこれからまた、壁にぶつかることが何度もあると思います。その時はカタバミを見て患者さんのことを思い出し、信頼する仲間とともに乗り越え、いつも笑顔を保ち続けて日々歩んでいきたいです。

編集後記

今年、3年ぶりの学校評価懇話会を開催しました。学生、教職員、学校外有識者、講師、実習病院看護師長、友の会理事、保護者の方が27名が集まり、この3年間の教育活動を交流しました。学生自治会が調査してまとめたアンケート結果と(この号に掲載)、流山市への給付型奨学金制度制定にむけた陳情、署名活動が報告されました。参加者から、学生の経済的困難への理解と、現状調査に終わらず地域フィールドとつなげ深い学びになっていると

発言がありました。その後、高等教育無償化プロジェクトfreeの大学生たちと活動交流をして、相互の活動への高い共感と今後への協同を確認しました。学校を超えて自分たちの問題で協同し、社会へ訴えている学生たちの姿に未来への希望を感じます。教職員たちも学生と共に学び成長して、また4月には25期生を迎えていきたいと決意を新たにしています。

編集委員長 窪倉みさ江

キラリ 学ぶ青春



2018年4月～
2019年3月
小林功
モノクロ写真館



基礎看護技術演習

江島典子先生（感染予防）



ガンカンジャーさゆりさん（命の授業）



地域フィールド



3年毎の学校評価懇話会



富山先生（公衆衛生）



勤医会東葛看護専門学校

編集・発行 勤医会東葛看護専門学校
〒270-0174 千葉県流山市下花輪 409 TEL.04-7158-9955 FAX.04-7159-7055
発行責任者 校長 窪倉 みさ江